

島原市水無川流域の火山観光化施設における観光動態調査

長崎大学工学部 学生会員 ○園田 雅樹 長崎大学工学部 フェロー会員 高橋 和雄
 長崎大学工学部 正会員 中村 聖三 長崎大学工学部 学生会員 二宮 耕平

1. まえがき

雲仙普賢岳の噴火災害(1990年～1995年)により、水無川流域では家屋や田畑の流焼失等多大な被害を受け、それに伴い多くの人々が島原を離れた。噴火活動も停止状態になり、復興事業もだいたい進んできたが、人口をもとの状態に戻すことは大変困難である。島原地域では従来の観光資源である歴史的建造物や温泉に加え、新たに火山を観光資源とし、観光客(交流人口)を増加させ地域の活性化を図ろうという取り組みがなされている¹⁾。そこで、本研究では、火山観光化の一環である旧大野木場小学校被災校舎と道の駅(土石流被災家屋保存公園)で実施したアンケート調査の結果を報告する。それをもとに、火山観光化に向けての課題を明らかにする。

2. アンケート調査の分析結果

(1)アンケート調査の概要 アンケート調査は、平成11年11月21日に旧大野木場小学校、同23日(いずれも休日)に道の駅で観光客を対象に、面接方式で行った。質問項目は、観光客の動態、交通アクセス及び火山観光化を問うものである。回収数は旧大野木場小学校で58、道の駅で105である。調査対象地域を図-1に示す。

(2)観光客の動態について 「どこから来られましたか」という問について結果を図-2に示す。旧大野木場小学校及び道の駅ともに九州内からの観光客が半数以上と最も多い。また、道の駅では長崎県内からの観光客も多い。「宿泊」については、旧大野木場小学校では宿泊客が74%(1泊48.3%、2泊以上25.7%)である。さらに道の駅では半数以上(53%)が日帰りである。

「観光客の動態」を地域的に大きく分けると図-3のような結果を得る。今回の旅行で「島原地域のみ」、「雲仙-島原」に立ち寄る観光客は、旧大野木場小学校で72.5%、道の駅で82.8%と大部分を占めている。その住所は旧大野木場小学校で長崎県内が26.2%、九州各県が54.8%で、道の駅では長崎県内が39.1%、九州各県が54%である。

「ハウステンボス」をコースに入れた観光客は全部で8人その内の5人は近畿、中部以北の住民である。また、「長崎市」に立ち寄る観光客は全体の16.6%その内の半数以上(59.3%)は近畿、中部以北の住民である。また、旧大野木場小学校に来た

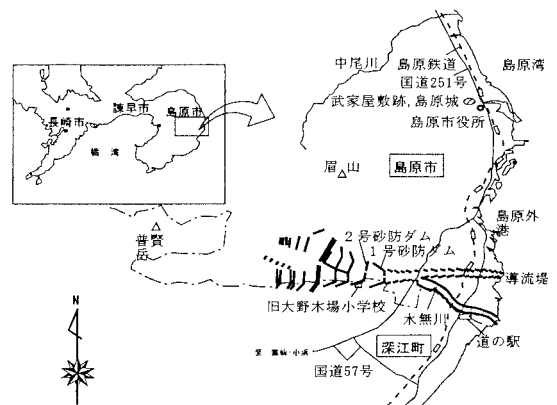


図-1 調査対象地域

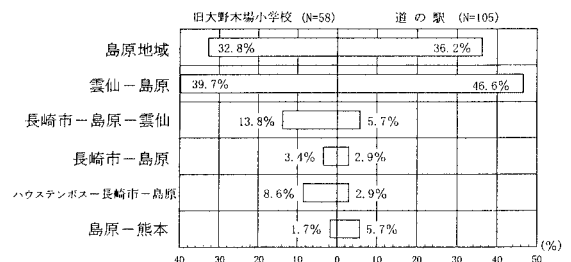
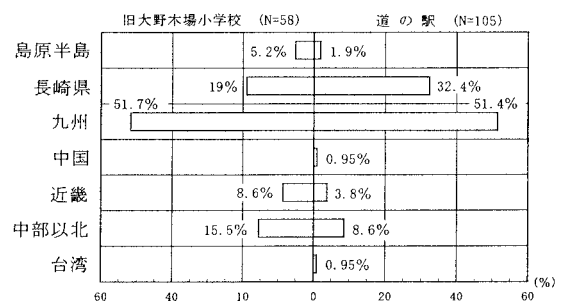


図-3 観光ルート

人の 37.9%が道の駅に行き、道の駅にきた人の 12.4%が旧大野木場小学校に行っている。

(3) 交通について 「島原での移動手段」について、旧大野木場小学校では自家用車(51.7%)、観光バス(22.4%)、レンタカー(12.1%)の順で多く、道の駅では自家用車(79.0%)が主である。島原観光に自動車を利用した観光客を対象にした「当地での駐車を含めて、スムーズに移動できましたか」という問に対して、「はい」と答えた観光客は全体の 85.6%で、多くの観光客が車で移動に対して不満を持っていないことが分かる。また、少数ではあるが「いいえ」と答えた観光客の理由は、60%が「当地までの案内標示が不十分だった」という回答である。

(4) 観光整備について 「島原地域を観光するために今後望むことを教えてください」の問に対して、図-4 のような結果が得られる。最も多い回答は「観光案内標識の充実」である。これは、前問の「スムーズに移動出来なかった理由」と合わせて、大きな問題である。

(5) 島原観光について 「島原には噴火以前に来られたことがありますか」という質問

では、全体の 36.8%が「ある」と答えており、その中の半数以上(56.5%)が「噴火前と比べて観光の魅力は増大している」と感じている。「島原地域全域の復興を図るために、長崎県が『がまだす計画』を策定したことを知っていますか」という質問では、「知っている」と答えた観光客は全体の 40.5%で、その内 92.4%が長崎県内と九州各県の住民である。また、「平成 7 年 5 月に火山噴火は停止状態であることが確認されています。観光するにあたってどう思われますか」という問に対して、図-5 のような結果が得られる。「不安はない」が最も多いが、道の駅の 71.4%に比べ旧大野木場小学校では 58.6%と低く、「水無川上流域被災校舎」を見た人の 41.4%が多少なりとも「不安を感じている」ことが分かる。「あなたは火山観光化についてどう思いますか」という質問では、79.8%の観光客が「賛成」としている。面談によれば「噴火災害で被害を受けた方には申し訳ないが、火山災害の恐ろしさを後世へ伝えるためにも、火山学習の場として整備してもらいたい」という意見をいくつか聞いた。

旧大野木場小学校被災校舎を見学した観光客を対象とした「あなたは、小学校の敷地が建設省の砂防指定地の中に含まれており、特別に保存されていることを知っていますか」という問に対して、約半数(51.4%)が「知っている」と回答。また、「大野木場小学校の周辺は将来火山砂防学習の拠点として整備される計画ですが、どのような整備が必要と思われますか。」という問に対しては、「展望塔の整備」と「砂防施設内の遊歩道の整備」という回答が多い。

3. まとめ

動態について、「長崎市ー島原」の観光客が、予想していたよりもだいぶ少なかった。これは、長崎市と島原との距離が大きく感じられるからと思われ、長崎市と島原との交通アクセスをもっと容易にする必要があると思われる。案内標示の充実が必要不可欠である。特に旧大野木場小学校の案内標識の設置が切実である。火山観光における情報の発信地「道の駅」を有効利用し、ここで観光地へのルートやパンフレットを手に入れることが出来るようにすることが望まれる。

参考文献

1) 島原地域再生行動計画策定委員会：島原地域再生行動計画（がまだす計画）、全 133 頁、1997.3.